BURST CITY
For Revolutionary Resistance
1992.10.1 No.2

A.R.P
Anarchist Revolution Project
C/O ARP
P.O.BOX57
SAKYO 〒606
KYOTO JAPAN

クルディスタンを帝国主義の墓場に！

クルド労働者党（ＰＫＫ）声明

アメリカ帝国主義が、クルディスタン（クルドの地）でもくろむ計画は徐々に明らかになりつつある。クルディスタンは、まさに革命勢力と反革命が国際的規模で戦闘を繰り広げる地となっている。この戦闘で我々革命勢力の部隊、あるいはこの地の先駆的勢力は敵の未曾有の重攻撃下、厳しい試練に直面している。この闘いは生死をかけた闘いでもあるのだ。そして困難な情況ながらも我々は前進を続けている。

クルド人民の名を語り、革命勢力に公然と敵対し、帝国主義の番人となりはてることでしか自らを維持しえない反革命勢力は、我々の闘いによって放逐されつつある。

湾岸戦争下、この地に展開した帝国主義の軍隊は、当初のコトバに反し、その駐留が「一時的な部隊展開」などでないことが明らかとなった。危機回避、秩序回復なる名目でこの地に投入された部隊にとって、「危機」とはクルド人民による蜂起であったのだ。だからこそクルディスタンに積極的な部隊展開を行なおうとしたのだ。

「クルド人の保護」と称してクルド人民に明確に敵対し、クルド民族解放勢力を包囲、攻撃せんがため、数千人にも及ぶ実働部隊をアメリカ軍は投入したのだ。

わがゲリラ軍のベースキャンプ周辺地域に米軍基地を建設し「安全地帯」を現出せしめることで革命勢力の前線を解体し、クルド人民の利益をなんら代表しない反革命どもと交渉のテーブルにつき、クルディスタンを帝国主義の支配下におこうとするもくろみは念入りに計画されていたことであったのだ。

もはや全世界の革命勢力を壊滅に追い込むことでしか生き延びるすべを見いだせない帝国主義は、その闘いのもっとも熾烈なクルディスタンの革命戦線に全体重をかけての圧殺攻撃にうってでている。

これは言うまでもなく、植民地主義トルコ国家の狙いと軸を一つにするものである。民族解放闘争を封じ込めることでしか延命をはかれないトルコ国家は日増しに拡大しつつあったクルド革命の脅威を、帝国主義勢力を全力結集して封殺せんとしていた。トルコにとって湾岸戦争はまさに「助け船」であったのだ。

これと同時に、いわゆるクルド語の禁止や自治権、政治犯、反「テロ」法等に関する議論の妨害、またクルド内スパイ分子どもと交渉をすすめるなど、トルコはあらゆる反革命的悪行をおこなったのだ。

ゲリラ戦争や、これに連帯して獄中あるいは山岳、大衆戦線で闘い抜かれているクルド解放闘争を破壊し、クルドの併合、懐柔をもってこの地の支配を貫徹することがトルコ国家のもくろみなのである。

帝国主義、とりわけアメリカ帝国主義にとって東欧変革以降の情況は、クルド民族解放闘争の強固な闘いゆえに、現在中東問題が帝国主義への最大の脅威となっており、この中東地域における支配の貫徹が重要な課題となっている。帝国主義は、我々クルドの解放闘争に対して、クルド反革命勢力をも糾合しての全面戦争を仕掛けてきている。これはベトナム戦争のような、たんなる正面戦といったものでもない。また東欧での情況のように全てを「協力者」の手に委ねてすすめられた支配システムの確立といったものでもない。これら両方を組み合わせた性格を持っているのが、このクルディスタンですすめられつつある事態なのだ。

すなわち「クルド人保護」を名目としてこの地に武力を投入し、クルド側反革命勢力をこの軍事力に依存させる形で増強させようというのが、帝国主義側の計画なのである。

クルド人への「人道的支援」の名のもとに「トルド問題の解決」に関する議論が開始された。トルド人民の独立と自由への要求を、いわゆる「人道的要求に基づく解決策」といった形に解体せんとしているのだ。そしてクルド人の「代表」として帝国主義協力分子を全面におしたて、承認、合法化することで支配を確立しようとしたのだ。ＫＤＰ（クルド民主党イラク）に一定の力を与え、その武力を我々クルド革命勢力に対置させることは、すべてシナリオどおりであったのだ。

今日、南部クルドにおいては、ＫＤＰがアメリカ軍と同盟関係にあり、その指揮のもとに行動していることは

ＡＲＧＫ（クルド人民解放軍）のゲリラ戦士

明らかである。ＫＤＰはアメリカ帝国主義の番犬となりはてているのだ。

そしてアメリカ軍をＡＲＧＫ（クルド人民解放軍）の拠点キャンプへと誘導し、いつでも攻撃できるように手はずをととのえているのだ。

「ＰＫＫは、あと数カ月しかもたない。」とか「ＰＫＫはアメリカやＫＤＰを批判するなど誤りをおかした。」などとする宣伝をタレ流すプチブルクルド修正主義者一派には、怒りの鉄槌が加えられなければならない。

帝国主義による運動の分断策動と内部闘争を回避するべく、ＰＫＫは他のグループと慎重に対応してきた。

しかしながら、クルド人民に明確に敵対しているＫＤＰは断じて許しておくことができない。

ＰＫＫは帝国主義の攻撃に打ち勝つべく統一戦線を呼びかけたが、帝国主義の傀儡となりはてたＫＤＰは自らの階級的利害のみで行動し、クルド革命に反対の立場を表明したのだ。中東人民抑圧の前哨基地としてクルディスタンを拠点化するといった帝国主義アメリカの陰謀は、トルコ国家の戦略もリンクさせる形でＫＤＰをクルド革命党派壊滅の先兵として積極的に利用しようとしているのだ。

クルディスタンはまさに革命勢力と反革命が全世界でもっとも先鋭に対峙する場となっているのだ。

我々ＰＫＫとそのゲリラ軍あるいは前方展開部隊は、いかなる犠牲を払ってもクルド人民の名誉を守りぬくために戦うことを宣言した。

これはクルド人民を防衛し、人民の独立への願いを前進させる闘いとなろう。そしてまた、帝国主義反動が企てる「新世界秩序」構想下、革命党に対しかけられた攻撃を粉砕しぬく戦いであり、反帝国主義の最前線で闘う人民の勝利の強固な連帯なのである。

この地域の命運を決して、アメリカ帝国主義打倒への誇り高き抵抗戦争と闘争が勝ち取られつつあるのだ。

帝国主義は軍事的に、あるいはドイツにおける非合法化攻撃などクルド人民の革命闘争を破壊せんと画策している。我々はこの攻撃をはね返すべく、反帝国主義戦線を基盤としながらあらゆる前線で闘っているのだ。

これらの闘いは、クルド人民にたいして負っている我々革命党派の任務である。ＰＫＫの帝国主義との闘いによってクルディスタンが防衛されてきたという事実にもかかわらず、自らを「反帝国主義者」と名乗りながら我々に敵対する反革命勢力を野放しにしてはならない。

我々への攻撃は、たんにＰＫＫやクルディスタンへの敵対といった矮小な問題ではないということを彼らは認識しなければならない。

クルディスタンで反革命勢力が勝利を収めるということは、すなわち中東における独立、自由、民主主義、社会主義の敗北を意味しているのだ。これはクルド革命における反帝国主義戦線と帝国主義反動の全面対決としてたちあらわれるであろう。

この地の反帝国主義戦線、とりわけトルコにおける左翼勢力やヨーロッパの民主主義、反帝勢力に広範に呼びかけ、共同統一戦線構築をもって帝国主義側の攻撃と対決することが我々の任務である。

クルディスタンは、クルド革命をもくろむ帝国主義によって地獄の戦場とならんとしている。帝国主義に隷属させられ、この地の人民を抑圧し続けた情況だけでもう充分である。反動どもはクルディスタンをさらにどん底にたたき落とそうとしているのだ。

我々はクルド人民の自由と名誉をかけて闘い抜くことを宣言する。クルディスタンを傀儡反革命と帝国主義反動の手に渡しはしない。

「独立か死か！」我々はこの言葉をしっかりと胸に刻み、わがクルド人民の名誉を断固として防衛しぬかなければならない。この我々の闘いは、帝国主義植民地支配と闘うあらゆる勢力、民主戦線に呼びかけられる。

そして必ずや仲間たちの連帯で勝利が勝ち取られるであろう。

この統一した勢力とともに我々は揺るぎない勝利をつかみとるのだ。

★クルディスタンを帝国主義と傀儡反革命どもの墓場に！

★帝国主義、植民地主義、あらゆる反動勢力を打倒せよ！

★人民の反帝国主義闘争万歳！

★クルド人民の独立と自由への闘い万歳！

★ＰＫＫ、ＥＲＮＫ、ＡＲＧＫ万歳！

ＰＫＫヨーロッパ代表部　1991年６月３日

クルドゲリラ トルコ軍を連続攻撃

ＰＫＫ（クルド労働者党）とＡＲＧＫ（クルド人民解放軍）による連続ゲリラ攻撃に対し、トルコ軍指揮官ドガン・グレスは南部クルド（北部イラク）地域における大規模軍事行動を発動した。とりわけ10月25日の戦闘爆撃ではナパーム弾、化学ガス弾なども使用し、北部イラク地域にあるクルド民間施設おも攻撃するなどした。

ゲリラ封じ込めのための戦略的重要性から、この地域の人口を減らすのがこの空爆の目的であった。

この地域で圧倒的に人民の支持を受けているＰＫＫは、1991年８月７日付けで「近い将来、クルド暫定政府を勝ち取ろう。」と呼びかける声明を発表している。

10月24日、ＰＫＫはトルコ国境前哨施設２ケ所と軍事センターを攻撃し、兵士17名死亡、負傷40名の戦果をあげた。また同週、ＡＲＧＫによるトルコ軍基地への連続攻撃戦闘では、計 208名のトルコ軍兵士を撃滅し、４名を捕虜として拘束している。

トルコ軍による「広範、強固な軍事展開」にもかかわらず、ＡＲＧＫは９月から10月にわたる連続ゲリラ戦闘を敢行しぬいた。

チリ山におけるテレビ局施設破壊戦闘にはじまり、９月13日にはドグベヤジッドで国境警備の主要幹線道を接収した。同作戦では幾多ものゲリラ攻撃が打ち抜かれ、トルコ植民侵略軍に対し多大な損害を与えた。

（３ページに続く）

クルド民族解放戦線インタビュー

以下に紹介するのは、ＰＫＫ（クルド労働者党）のＥＲＮＫ（クルド民族解放戦線）代表ボディム氏とのインタビューである。

●ＰＫＫの目的とするものはなんですか

ＰＫＫは、自由、連合、独立、民主のもとにクルディスタン（クルドの地）を築くことを目的として、1978年11月２日に結成された。マルクス・レーニン主義を指導原則としている。

ＫＤＰ（クルド民主党）などは、自らをイラクＫＤＰあるいはイランＫＤＰなどと規定しているが、我々ＰＫＫは、クルディスタン問題を特定の被支配地域に限ってとりあげるような位置づけはしない。ＰＫＫはトルコの支配下にある北西クルディスタンで結成され、今も同地方が我々の最も強固な基盤であるのだが、トルコＰＫＫといったとらえ方をしないでほしい。ＰＫＫは、全クルド人民、労働者階級の党であり革命勢力なのだ。

ＰＫＫが目指すのは一部地域の解放といったものではなく、クルディスタン全域、すなわち現在トルコ、イラン、イラクによって占領されている地帯の解放なのだ。

●湾岸戦争に対するＰＫＫの立場は

この戦争でフセイン政権は、今まで財政的、軍事的な「援助」を与えてもらっていた西側諸国に逆に噛みついた。トルコはキルクーク、モッスールを併合するという「夢」を前々から抱き続けて来た。イラクも同様に、クウェート侵略をもって油田を獲得し、世界におけるサダム・フセインの地位を重要なものとせんと企てて来た。

ＥＲＮＫは、イラク人民にではなくフセインの軍隊、そしてイラクによる（クルディスタンの）占領に反対しているのだ。帝国主義勢力は自らの石油略奪政策がとのようになろうとも、支配、抑圧だけは貫徹しようとしている。

帝国主義者らは「フセイン征伐」の口実のもとにこの地を占領し、新たな抑圧をもたらし国境を自分達の利害にもとづいて策定し、我々を分断しようとしている。

●湾岸戦争の際、ＰＫＫはどのような闘争を展開しましたか

湾岸戦争は我々にとって大きなチャンスを与えてくれたと言えよう。

この機を利用して、南部クルディスタン（イラク）地域での部隊組織形成で進展することができた。問題は武装闘争ではない。そんなものはいつだってできるのだ。帝国主義戦争を、人民を組織することでいかに反帝国主義戦争、民族蜂起へと転化していくか、これが我々の課題なのである。この間トルコ軍に対してはヘリコプター撃墜、ファシスト将官殲滅など数多くの軍事作戦を展開し、勝利してきた。

●イラク地域内での自治権を要求しないクルド人組織もあると聞きますが、これに対する見解は

現在迎えているこの状況は、数年に一度あるかないかのチャンスであるといえる。1917年のツァー率いるロシア政府とドイツとの戦争は革命勢力にチャンスをもたらした。いままさに中東とクルディスタンが同じ状況なのである。

クルド人民は自治権のみを要求しているのではない。先の見解なるものは、マスコミそしてクルド人民分断をもくろむ勢力によって偏向して伝えらえているものだ。

クルド人民の連帯は強固である。これはハッキリと言っておかねばならない。

そしてさらなる連帯へ向けてＰＫＫは民族大会開催を各組織に呼びかけている。これは大規模な国際大会となるであろう。クルド人を代表するあらゆる組織が出席する予定である。プチブルグループ、我々共産主義勢力、とにかく全ての組織である。パレスチナの統一戦線のような真の民族の大会となるであろう。

●イギリスのトロツキストグループは「労働者の党がブルジョア、プチブルジョア組織などと野合するのは誤りである。」という見解を出していますが、これについては

我々の根拠は民族にある。まず第一に民族の解放を成し遂げなければならない。それから階級の解放、社会主義があるのだ。我々は帝国主義と植民地主義によって抑圧の下にさらされている社会のあらゆる部門を一つの勢

（２ページからつづく）

９月19日の製油プラント攻撃など、連続ゲリラ行動はとどまるところを知らない。また鉱山占拠をもって鉱山労働者らと、トルコ植民侵略軍らによる鉱山資源収奪の実態について討論した。（のちにこの鉱山はトルコ軍に報復攻撃をされ破壊されている。）

10月３日には同地の市長の居住する地区を攻撃、占拠し燃料貯蔵所を破壊した。またこの後、地元住民との交流集会を勝ち取っている。

これらクルドの戦いに対し、トルコ政府は虚構に満ちた反動的キャンペーンを展開した。新聞では「ＰＫＫに武器を供与しているのは、湾岸戦争で多国籍軍に協力したトルコに憤激したサダム・フセインである。」などと書き立てている。トルコ国家のもくろみはもはや明らかである。

トルコ軍指揮官ドガン・グレスは次のような発言をしている。

「もし我々トルコ軍が民主主義なるものを考慮せずにゲリラどもに対処してもいいというなら、全ては７ケ月でカタがつくはずだ。奴らは水中でうごめき獲物を狙っているサメのような存在だ。この私が始末してやる。水ごと切り裂いてズタズタにしてやるのだ。」

力にしなければならない。過去ベトナム、モザンビーク、ブルガリアがそうであったように。

●おもな帝国主義政府とソ連はイラクに対し、「国境線の維持を保証する」と発表しました。帝国主義がクルド解放運動に反対する理由は

クルディスタンは石油資源、水資源も豊富で肥沃な地帯である。中東においては様々な意味でこの地帯は重要な意味を持っている。

歴史的に中国からヨーロッパへの、あるいはアフリカからロシアへの分岐地点であった。このゆえに過去幾多もの民族がこの地を支配しようと試みてきた。クルド人はこのため、いまだかつて組織されたことがないといえる。また他民族どうしの紛争にクルド人が利用されてきた。

ＰＫＫ書記アブドゥラー・オカランはこう述べている。「クルド人ほど長きにわたって他民族間の戦争に利用され続けた民族はないであろう。クルド人民は、イスラム、イラン、イラク、トルコのために戦った。しかしクルディスタンのために戦ったことは一度もないのだ。」

湾岸戦争で、イラン、イラク、トルコは、交渉、封鎖、同盟、譲歩などあらゆる手をつくして再び我々を利用しようともくろんでいた。この過程で帝国主義者は、クルド民族運動のブルジョア勢力を手中に収めようとし、クルド問題に関心があるかのような態度を示し、クルドの要求に耳を傾けるかのようなそぶりを見せていた。

結局、湾岸戦争がひととおり終結し、帝国主義者にとってクルド人民などもう必要なくなってしまい、ブルジョアグループから出された要求についての交渉は打ち切られた。

●社会主義国の崩壊により帝国主義支配システムはさらに猛威をふるい、今や世界征服、分断が思いのままになされようとしています。クルドの戦いへの影響は

今や帝国主義勢力はなんでもやりたい放題である。社会主義ブロックの崩壊で、彼らの障害となるものがなくなってしまったと言えるであろう。イラン・イラク戦争では社会主義諸国が存在していたため、湾岸戦争のような好き勝手を帝国主義側はしなかった。しかしながら我々はこの情況を社会主義の死であるとは思わない。

社会主義は停止し官僚制は終焉したが、社会主義そのものは死んではいないのだ。マルクス・レーニン主義はいたるところで生きている。ＰＫＫの実践もそのうちの一つであろう。

●ソ連内にクルド人がいますが、彼らの状況は

現在ソ連内には約50万人のクルド人がいるようだが、少数民族として扱われており、またソ連にクルディスタンの領土がないためクルド問題はないといえる。

これらほとんどのクルド人は、アルメニアのエレバンにいる。クルド人として、ラジオ局、学校、メディアなど諸権利が与えられている。

●イスラム原理主義に対するＰＫＫの立場は

クルディスタンにもイスラム原理主義は存在するが、深刻な問題ではない。彼らに不当な扱いをするようなことがあったのなら、我々の闘争はこんなに拡大しなかっただろう。

モスクでの礼拝の後しばしば街頭でデモとなるが「イスラム万歳」とは叫ばない。「クルディスタンの自由と独立万歳」と叫んでいるのだ。

民族問題を解決することが我々にとってまず必要なことであろう。それから宗教、言語、文化等個々の問題に取り組んでいく、という立場である。中東においてはイスラムが運動の重要な要素であるのは事実だ。

宗教問題にはふれない組織もある。これらグループはこの問題をブルジョアの手に委ねることで解決しようとしているのだ。こういったやり方は、この問題を扱うにあたって決していい方法ではない。

●クルド人民の戦いと、トルコ、シリア、イラン、イラクの労働者階級の戦いとの関係については、どのような位置づけを

トルコファシスト国家との戦いには、トルコ労働者階級との連帯が不可欠であり、互いに力を必要としあっている。自らの国土で抵抗の戦いを遂行することが我々の任務である。この戦いがトルコ労働者階級に、そして全世界の労働者階級に連帯を呼びかけていくのだ。

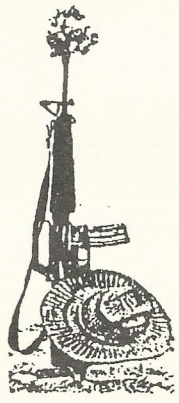
多くのクルド人民が、パレスチナ人やレバノン人、そしてトルコ人民らとの戦いに追い込まれた。クルディスタンは四つの地域に分かれているため、クルドの革命闘争を単純にベトナム、モザンビーク、キューバでの革命と比べることは出来ない。我々は四つの前線で戦っている。つまり四つの異なった地方の人民と関係を構築しているのだ。もし我々がクルドの独立を勝ち取ったならば（クルディスタンをとりまく）四つの民族も解放へ向け前進するであろう。こういった観点から、我々の戦いは国際主義の戦いであるという認識に立つものである。

クルドの革命闘争は、1917年の十月革命のロシア人民のような役割を演じている。この革命の成功は必ずや抵抗と変革への戦いを喚起するであろう。

我々の開催する国際大会ではぜひともすべての国際マルクス・レーニン運動組織と交流をはかり、左翼運動の強化をはかっていきたいと願っている。

社会主義諸国の崩壊以後、革命勢力による国際的左翼運動の強化が以前にもまして急務の課題となっている。

（CONTRO informazione internationale #5）



クルド政治犯への攻撃を粉砕せよ！

全ての闘う同志、仲間の皆さんへ

我々は、トルコ国家による獄中の仲間への不当処遇、抹殺攻撃を断固として粉砕せねばならない。

トルコファシスト国家はクルド人に対し、国家的テロルの恐怖を日々増大させている。10月20日総選挙での祖国党の「勝利」は、スレイマン・ダミレル政権の暴力的国家政策をより一層激化させるものとなるであろう。

トルコ国家はＰＫＫ、ＥＲＮＫ、ＡＲＧＫがクルドの地で戦い抜いているゲリラ戦争を暴力と血でもって徹底的に壊滅せんとしている。

トルコ国家によるＡＲＧＫへの武力攻撃を、我々はクルド全人民に対する宣戦布告と受けとめる。

首相スレイマンそしてトルコ軍将官の会見では、トルコ国家はそのテロルとクルド虐殺計画の継続を公然と宣言している。南部クルディスタンではナパーム弾爆撃民間人を虐殺し、北部においては移住の強制、特殊殺戮部隊の投入など暴虐の限りをつくしている。

また監獄内ではクルド人に対する重弾圧、拷問が行なわれている。

この数カ月の内に多くの政治犯が釈放されたが、クルド人だけは別であった。彼らは「トルコ刑法 125条」により起訴され重刑攻撃下にある。我々の仲間を人質として捕らえ、一般刑法にてらしてみても明らかに違法である不当な獄中処遇を断じて許してはならない。

また、彼ら拘束中の仲間は戦争捕虜として扱われるべきである。

つい最近、エスキセヒル特別刑務所ではクルド政治犯収容特別独居房が大量に増築され、仲間の移送が開始された。トルコ政府に対し不転向、非妥協で闘うクルド戦士への肉体破壊攻撃、転向強要のための施設であることは明らかである。我々はまず人間として、この非人道的処遇に反対の声をあげなければならない。

そしてトルコ国家によるクルド人政治犯抹殺攻撃を阻止すべく、全ての闘う革命勢力、民主勢力に以下の我々のアピールを支持するよう訴える。

1．トルコ政府に軍事的、政治的支援を続けるヨーロッパ諸国の「援助」を阻止せよ！
2．トルコ刑法125条により起訴され、拘留中のクルド人政治犯を戦争捕虜として扱い、不当処遇を中止し、ただちに釈放せよ！
3．エスキセヒル刑務所への独居房隔離攻撃を即時中止せよ！
4．トルコ国家の人種差別政策を粉砕せよ！
5．不当な獄中弾圧弾劾！
6．クルド人への虐殺攻撃阻止！
7．クルドにおける強制移住攻撃阻止！

さりげない自己主張

黒星バッジ

秋頃入荷！！

COMING SOON 実物原寸

送料込　500円（予定）

★バッジA～アナキストの黒い星
★バッジB～アナルコ・サンジカリストの赤黒星

予約受付中．申込は、郵便振替口座　大阪5-1460　AR編集局まで

◎本紙の編集方針

本紙は、世界中で行なわれている革命闘争、とりわけ武装闘争と直接行動を中心に紹介するために発行されています。

闘争を行なう組織、運動の思想的な傾向によって、情報を選択することは行ないません。掲載する基準は、あくまで世界中の革命闘争の中での重要度に置きます。

それらの中から「何か」をつかみ取って欲しいと思っています。

いつでも！

Arm The Spirit！

アメリカ政治犯の状況 (2)

●アッティカ裁判

さる2月4日、ニューヨーク、バッファローで行なわれたアッティカ事件裁判で陪審は、死者43名、負傷者90名を出したアッティカ刑務所蜂起鎮圧作戦におけるニューヨーク州当局の責任問題で「州はその責任の一部を負う」とする評決を下した。

アッティカ刑務所元代理刑務官カール・プフェイルについては、獄中者に対する2件の暴力行為には責任があると判断。しかしながら、懲罰委員ラッセル・オズワルドと元刑務官ヴィンセント・マンクージらの責任は不問となった。

この日陪審はまた、1974年に1281名の獄中在監者が起こした民事訴訟（28億ドルを請求）で、当時の獄中処遇と医療体制は不当かつ劣悪なものであったことは明らかである、と裁定を下した。これについてアッティカ刑務所元在監者アキル・アル・ジュンディ（訴訟代理人）は「一部勝訴」のコメントを発表した。

「カール・プフェイルはしとめた。しかしオズワルドやマンクージなど逃げのびた獲物は大きかった。」と述べた。

この後原告、被告双方とも控訴すると発表している。

●プエルトリコ独立運動関係

12月10日、コネチカット州ハートフォードの連邦地裁は、プエルトリコ人ジャーナリスト、デイジー・サンチェスに対し「ビデオテープ提出は必要ない」との裁定を下した。

このビデオテープは、サンチェス記者がプエルトリコゲリラ組織「マケテロス」の2リーダーらとのインタビューを昨夏取材、収録したものであった。

弁護人ジョン・ショーエンホルンによると、そもそもこの裁判はサンチェス記者の取材を受けたゲリラリーダー、フィリベルト・オイエガ・リオスとルイス・コロン・オソリオを捕らえることの出来ないアメリカ政府による嫌がらせであったことは明らかであると語っている。

1月13日、数百名にもおよぶサンチェス記者支援グループが開廷中のプエルトリコ、サンホセの連邦ビル前でデモを行なった。

またこれと関連して、プエルトリコ独立運動活動家エリアス・カストロ・ラモーンに対して「強盗と強奪紙幣移送の謀議」をもって有罪とする判決が下った。

この他、イサック・カマチョ・ネグロン被告には「懲役5年と1万ドルの罰金」という判決が下されている。

二人は、マケテロスグループによる83年のウェリス・ファーゴ銀行襲撃事件で「懲役15年」を求刑されていた。

●ドルーバ・ビン・ワハッド

92年2月12日、ドルーバ・ビン・ワハッドは、91年12月19日のニューヨーク最高裁判決の再収監命令に基づいて法廷に出廷した。

2月5日の法廷審問に出廷せず召喚通告を受けたためである。ドルーバが出廷しなかったのは、彼の弁護士が都合で出廷出来ないために出した審問の中止申請を判事が却下したためである。

12日、結局判事は次の審問のある4月まではドルーバを拘束しないという方針にしたようである。前述の12月19日裁定はドルーバへの有罪判決を再確認し、再び収監への道を開くものであることは明らかである。

有罪判決のあった3つの裁判で保留となっていた決定的な証拠が証明され、ドルーバは19年に及んだ投獄から解放された。詳細は下記まで。

Campaign to Free Black Political Prisoners
and POWs in the U.S.
P.O.Box 339 Kingsbridge Station, Bronx, N.Y
10463-0339, U.S.A.

好評 ゲバタリオン

増刷 Tシャツ

今回から前面のみの1パターンとなります。

サイズ L・LL

2500円

(送料250円)

申込は
振替口座 大阪5-1460 AR編集局まで

世界の革命運動の情報紙

BURST CITY
For Revolutionary Resistance

★発 行 ARP
(Anarchist Revolution Project)
★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP
★定期講読料 10号分 2000円 今号 150円